

「居合わせる場」としてのカフェ —学内カフェを事例として—

吉岡 実佳

1. はじめに

都会という言葉から連想されるもの。都市犯罪、孤独、軽薄な人間関係・・・というレッテルが次々に重ねられる現代、都会の魅力とは何だろうか。カフェ、・・・。時間と空間を買う場所として東京を中心とした都会でここ数年、急激な社会現象をおこしている。都会の人々は何を求めてカフェに集うのか、カフェはどういった場であるのか。そこにコミュニティはあるのか。カフェ発祥の地、ヨーロッパでは古くから「都市の市民にとって第二の家庭」、サロンの場として育まれてきた。しかし近年のカフェブームによって次々に生み出されているカフェと呼ばれる場には、「空間を含めて運営し、つくった人間が表現メディアとして機能させたいという強い意志がある」とか「集う空間であり、演劇的な表現の場」として機能させようとしている人々の思いがあるという。このような時代にあって折しも、大学内にカフェを立ち上げ、そこに筆者も参加する機会を得た。

都市生活者にとって重要な場となっていると思われるカフェのあり方について、大学内でのカフェのあり方を観察し筆者がカフェという現場に参加しながら観察を行うことでその果たす役割について考察してゆく。

2. カルチャーカフェの歩みと筆者の関わり

昨年5月、九州大学箱崎キャンパス内に新設する建物（「21世紀交流プラザ」）内にカフェ（名称：カルチャーカフェ）を常設しないかという依頼があったことからチームを結成し昨年10月の開店に向けての活動を開始した。本論中では、店員として登録されている人を「スタッフ」、スタッフの管理や経営に関わるコアの人を「プランナー」、現場で働いているスタッフを「店員」と呼ぶ。プランナーはオープン近くになると、店長兼シフト係、渉外係、会計係、イベント・広報係、資材係（筆者）として責任を持つこととなる。依頼のあった5月からオープンの10月までのプランナーを中心とした仕事は、カフェ内部のゾーニング、家具（イコン）選び、資材（コーヒー豆など）の取引、保健所・大学との交渉など一切の運営に関わることであった。こうしてカルチャーカフェのオープンまで、筆者は研究者になる以前から、参加者としてここに関わることとなったのである。

3. 問題と目的

—“交流の場”としてのカルチャーカフェ—
カルチャーカフェのコンセプトは、21世紀交流プラザにあることからもおわかりになるように、“他学部の学生や留学生などの交流を目的としたスペース”である。当初はカウンター席を設置して、店員と客とがカウンターを挟んでおしゃべりでもしながら過ごすこともできる場というものを想像していたのだが、想像以上の反響があり、カウンターは非常に忙しい場となってしまった。「思っていたより忙しくて、交流ができない！」という言葉があちこちで飛び交うようになった。ここでいう“交流”とは、“会話”をさす。しかし、筆者の中で問いかけがうまれた。交流＝会話なのか？会話だけが交流なのか？ここは会話をするためだけの場所なのか？本来のカフェとは何？そして、カルチャーカフェがこの空間に貢献していることは何？これらの問いについて次章から解明してゆくこととする。

4. 観察及び考察

カフェに関する概念が曖昧であるので、その歴史からまず考察する。その歴史の中でコミュニティの場として機能してきたことについてを4-1章に、プライベートとパブリックの界面として考察したものを4-2章に記述する。また、筆者が観察を通して気付いた、「ものをつかったコミュニケーション、ものとひととのコミュニケーション」についてを4-3章に、アクティビティとの関わりについてを4-4章に、そして最後に「居合わせる」という語を用いて考察したものを4-5章に記す。



写真A；カルチャーカフェの様子（内部からみた）

4-1. コミュニティの場としてのカフェ

カフェは、ヨーロッパでは長い歴史の中で文化的な1つの場になっている。新聞や雑誌が置かれていたり討論をしていたり、本来そういう、サロンのような発想がカフェにはあった。今でもイタリアでバルと呼ばれる立ち飲みのカフェは、朝食をとる時、友人と会った時、・・・1日に何度も訪れる人々の大切な生活の場であるという。日本では、という、夜中のコンビニエンスストアで立ち読みしている一角ですら、ちょっとしたコミュニティの場になっているくらいで、コミュニティが育まれるスペースは不足しているとみてとれる。都市空間の中でそういった、コミュニティを育むスペースが少なくなってきたことに危機を覚えるべきである。

そして、ここ数年急速に勢いをつけて発展してきたカフェという空間が都市のコミュニティの場として役割を担う一手にならないだろうか。近年、若いアーティストがさかんにカフェやバーをつくるのは、プレゼンテーションする場をカフェにすり替えているのではないかと懸念する声もきかれる。

コーヒーをのんでいる人もいれば、作業する人もいる、そういうことを共有できる場であり、共有する人が居るといことがルールとして守られていけば、後は来る人の中にあるかが居心地を左右するだけである。隣の人の邪魔にならないようにそこに居るといことが、すでに、お互いを認識し、その場を共有しているといえる。全員が個々の装置に関わっていて、コーヒーを飲みながら複数で集うことがなりたっている、ひとりで行けばプライベートな場の使い方として紛れ込め、仲間で行って集えば、インフォーマルなコミュニケーションをつくる場として機能する。

街中のカフェは、都会にのみ特有な状況を生み出し、衆目の中で合法的に腰をおろし、移りゆく世界をのんびり眺められる場所であり、ここでの魅力的な体験の意味は公園や広場、カフェで他人との交流を楽しむという前提で、環境に留まる権利、情景の一部に溶け込む(鈴木という言葉でいうところの”居方”)儀式がある。カルチャーカフェもアクティビティが多様にみられ(次頁で述べる)、そして紛れ込めること、集えること、人が集まり散ってゆく NODE として機能しているところがその魅力ではないだろうか。カルチャーカフェには、カフェを利用しようとして来た人だけがそこに居るのではない。2階のITサロンへ行くために通過する人、店の奥にある洗面所を利用するために通過する人、なんとなく入ってきた人、その他にも様々な人が居る。目的を同じとするコミュニティの場ではなく、ひとりでも集団でも友達でもま

ったく知らない人とでも隣に座ることが出来る場としてのコミュニティ。そこに居るすべての人が個々の装置に関わりながら集まっている意味が減り立つためには、カフェという装置がそこにあり、共通のルールを持ち込むことでその空間が一体化し、コミュニティとして機能するのではないだろうか。公園では静かに座って居られるが、大量の人間は通過しない。それはより私的で安らかな体験であるが、カフェは静かに座ってくつろぐと同時に極めて公的な空間でもある。コミュニティの社会的接着剤の役割。以前からの住民と知り合える数少ない環境のひとつとなる。

パタンランゲージ(Alexzander Christopher,1977)に、カフェの三原則は、こう記されている。

- 1) 地元の常連客がいる。カフェの店名や従業員が近隣に深く根をおろしている。
- 2) 柔らかい椅子、新聞、暖炉などのいくつかの空間があり、さまざまな人が思い思いの流儀で利用できる。
- 3) 簡単な食事と飲み物を提供する。バーと違って朝一日の出発としてでかけたくなるような場所。

4-2. プライベートとパブリックの界面

プライベートとパブリックをつなげていくような、カフェという装置がオープンネスにある。レストランとの違いは何であろうか。レストランはパブリックな空間に介入しているものではなく、私的な集いや特別な人と一緒に過ごす、ある意味封鎖された時間、空間をつくる仕掛けである。しかしカフェは、レストラン的な内部空間を外部にまで開放し、中間でひとつの界面というインターフェイスをつくっている。プライベートなスペースであると同時に、パブリックに開かれた装置なのである。内部空間と街路のインターフェイス、その両者をつなげる空間をカフェという装置がつくっているのである。パブリックな空間に触れたかたちで作りだされた親密な空間が中間の領域で、パブリックとプライベートの狭間にある仕掛け。そしてこの仕掛けが演出されている。パブリックの介入ということが都市の中で装置として活用されている。

カフェの椅子に座って何かをしている人(パフォーマンスする人)と、通り過ぎる人や足を止める人(観客)との劇場的なやりとりがある。これはここカルチャーカフェでもみられる光景であるが、ここには”みる・みられるの関係”があるといえる。日常の中にありながら、どこか非日常の場でもあることがこの、劇場性にあるのではないだろうか。カフェに座っている人と通り過ぎたり足を止めたりする人の、どちらが観客で演技者かは相互的で、視線が相互にぶつかり合っている。席を選ぶま

ではパフォーマンスしているが、席につくとなじんで役割を変えてしまう。ある仲間の非常に緊密なコミュニケーションが集中的に行われている場であると同時に、しかしそこには誰でもが介入可能なツールを常に持っていてそれが開かれていることがカフェのひとつの生命ではないか。パブリックに開かれた場でなければカフェとはいえないのである。カルチャーカフェはこの点で、カフェと呼べる場であるといえる。観客と演技者が入れ替わることで役割が固定化していないことでの人々のその場での可能性の広がり、そもそもこの観客と演技者の居る空間（カフェ）が開かれているからこそ、カフェの創り出すコミュニティはゆるやかな、やわらかな場であり得るのである。

4-3. ものを使ったコミュニケーション、ものとひととのコミュニケーション

友人と食事している時に、相手の食べる速度をうかがいながら食べることは誰でも想像できる体験であろう。カルチャーカフェでの観察で、コーヒー（飲み物）を口にするときは、会話の合間であることが多かった。本を読む時傍らに置かれたコーヒーは、たいてい細かく分けられて飲まれる。知人とカフェに入ったとき、時間があればコーヒーは少しずつ口にするであろう。コーヒーには、作業の息抜きや会話と会話の繋ぎの役割、”間”を調整する役割があるといえる。また、コーヒーを買うという行為は、単に生理的に喉を潤すということだけを望んでいるのではなく、その場と時間を買う（昔からよく言われるが）ことでもあるといえる。コーヒーをのみほしてしまい、そのカップが片付けられると何となくもうそこに居てはいけなような感じを受けることがある。観客としてそれはチケットとなり、また、演技者には衣装となる、そんな道具であり得るのではないか。コーヒーは、”そこに居てもいいのですよ”という理解を与える。誰かとコーヒーを飲むとき、のみほしてしまうとその場がもたなくなる感じがして席をたつまで最後の一口は残してある。ボールがあつて、キャッチボールをしようというように、コーヒーにも、ひとの行為を調整する役割があるのではないだろうか。コーヒーによってそこに、時間が作られ、空間も作られることになる。ここで、コーヒーを買うことをショッピングのひとつとして考えてみる。「もの（コーヒー）」と「ひと」の間には、これ（コーヒー）を手に入れる場合、感覚での体験がある。コーヒーを飲む行為の前段階でコーヒーを買う行為が必然的に存在する。寒い日にドアを開けてカフェに入ると、そこは陽も差しこんであたたかく、大きなガラスからは外の景色がよく見え、天井は吹き抜けで高く、開放感のあ

る空間を肌で感じ（触覚）、心地よい（そうでない場合もある）音楽がかかっている、コーヒーを準備する音や注文のやりとりの音がカウンターから、また、客席からは人のざわめきが聞こえ（聴覚）、コーヒーのいい香りに包まれ（嗅覚）、メニューの看板に目をやり、どのくらいまで居られるのかと営業時間を確認し（視覚）、コーヒーを手に入れることができる。”感覚的コミュニケーション”があつてこそ手に入れる過程である。つまり、”感覚的コミュニケーション”は感情的・精神的プロセスである。これが起る場、カフェは、「ひと」と「もの」とのコミュニケーションの場であり、コミュニティの場として提案され得ることがわかる。「ひと」は「もの」が発信する情報を知覚してコミュニケーションが生まれる。さらに、「ひと」と「ひと」とのやりとりは知覚に加えて会話を通して情報のやりとりがあり相互交流（トランザクション）をする。道端にボールあることを知覚し、ボールを使ってキャッチボールしようというのは、「もの」から「ひと」の行為が触発されたといえる。キャッチボールがしたくてボールを探していたわけであれば、「もの」というのが「ひと」にアフォーダンスを引き出させる重要な役割を担っていることといえ、コーヒーも五感に訴える意味で重要な存在といえるのではないか。

4-4. アクティビティを眺める場

都市の公共空間にアクティビティがあることは今でも重要視されてきているが、そのアクティビティを眺めることができる場として、このカルチャーカフェはその可能性を大きく含んだ場所であるといえるのではないだろうか。昼、客席に座っている人の視線、体の方向には様々な居方があつたので写真Aを見ていただきたい。

カルチャーカフェからは、ガラス越しに様々なものが見える。左手に大きなクスノキが見え、さらに奥には書籍部で立ち読みしている人の姿も見える。一方右手には噴水も見える。そして道を行き交う人々が見える。人の行動を見ることが人の行動への引き金となる。いろいろな空間が覗き込めると人々の世界は拡大し、豊かになり、さらに理解が深まり、そこにコミュニケーションと学習の可能性が生まれるといわれている。

4-5. 「居合わせる場」としてのカフェ

ここでは、知人との会話や店員との会話（積極的交流）以外の、カフェで起こっている事象についてみてゆきたい。カフェで時間を過ごすことの意味を、次に述べる”居合わせる”という言葉に照らし合わせて見てゆく。

「居合わせる」という造語（鈴木毅,1993）がある。

- ① ある程度限定された公共空間における
- ② 対等な立場の他人同士の

- ③ 個人個人の偶然の集まりのことで、
④ この他人同士は別に直接会話をするわけではないけれどもお互いどのような人が居るかを認識しているその場の状況のこと、

というものである。空間に人間が居て（建築雑誌では人が居ない写真が多いが）初めて成立する状況のことである。この定義にカルチャーカフェをあてはめて考えると、21世紀交流プラザ内の1階の囲まれた空間であることから①（写真A参照）、店員と客、また店員同士、客同士も対等の立場である（学生であるから）ことがほとんどであるから②、カフェの空間に居る人は、すべての人が申し合わせてそこに居る訳ではないので③、しかし④についてはわかりにくいので筆者なりの解釈をしたものを次に述べる。

会話が成立していない場で、「お互いどのような人が居るかを認識しているその場の状況」というのは、一体どういうことか。まず、ある場所（この場合カルチャーカフェ）に居ること自体が積極的な行為であるといえる。そこに居なければならぬ特別な理由がなくそこを選んだのであれば、それだけで十分意味のあることである。カフェに居る人々の行為をインタビューなどせずに観察だけでピックアップした第三者の筆者の目には、様々な人の行為があった。コーヒーを飲む人、知人と会話する人、店員と会話する人、通り過ぎる人。私が始終観察し、何百枚もの写真を撮ってきた中で、「この人はどうしてここに居るのだろうか、一体何をしているのだろうか？」と思う人は一人も居なかった、といってもよいくらい、ひとりひとり、またはある集団の行為は誰からも了解されるものばかりであった。

これは、お互いが他人に対して無意識でも意識しているにしても、了解されるように振る舞っていることを示唆することである。つまり、4-2で述べた、“みる・みられるの関係”がそこにあるということになる。ここでひとつ筆者自身のエピソードを紹介する。筆者が観察をしようとフィールドであるカフェへ入るときには特別な心構えがいった。それは、観察者としてそこに入っても、すぐ参加者（スタッフ）としてそこに居てしまうことを自覚しつづける心構えである。カウンターの方には知り合いがいるのであまり近づかずに入り、できるだけ全体の雰囲気を感じられる場所に席をとり、あまり知人と目を合わせることがないように、そして、周囲のカフェで過ごす人々に怪しまれないよう、気を遣いながら観察を続けるのである。この状況は私にとってはこの“カルチャーカフェ”という特別な空間で起こる事象で、“観察をする”ということと“参加者として活動する”ことを

いれかわりたちかわりしていた。観察していても備品が足りないことに気づいてメモをとったり、スタッフに声をかけずにはいられないことがよくあり、カウンターを見ていて忙しい時は、自分が働いていないことに心苦しくなる。こんな時、自分が観察をしているということアピールする他ない。つまり、観察者としてフィールドにはいるとき、自分が「了解」されるように意図的に振る舞っていることに気付いたのである。

5. まとめ

さまざまな行為をする人々がお互いを認識し、カフェという空間を共有し、個々の居方を尊重し合っているコミュニティの場として（4-1で述べた）、またプライベートとパブリックな領域の中間にあることで、演技する人（椅子に座っている人）と観客（通り過ぎる人）との間に“みる・みられるの関係”がなりたつ劇場性を持つ場として（4-2で述べた）、ものを買うという行為の過程で起こる“感覚的コミュニケーション”での、“もの”のひととのコミュニケーション”の場として、また、“もの”が、“そこにいてもいいですよ”という了解の役割をするひとつとなり（4-3で述べた）、大きなガラスで囲まれた空間からはアクティビティを多様に眺めることができ（4-4で述べた）、そして、これらの特徴を統合する言葉として「居合わせる」という造語があてはまるといえよう。カルチャーカフェ、そこにもし会話というものが存在しなくても、コミュニティとして十分機能し、その場にはひとやものが生みだしたコミュニケーションがある。さらにアクティビティをも眺められることで人々の行為を育むきっかけとなる。このように、カルチャーカフェは、そこに居る人にとって、非常に有意義な場であるといえるのではないだろうか。今回はカルチャーカフェの観察からの考察にとどまってしまうが、都市の住民にとっては街中のカフェという場が、昔とはカタチをかえた現代でもそこは重要な場であることにはかわりはないということを示唆することはできるであろう。



写真B; カルチャーカフェの様子（外部からみた）